

「感情知能」と「創造性」との関連性について

酒 井 久実代*

A Study of the Relationship between "Emotional Intelligence" and "Creativity"

Kumiyo SAKAI*

This study examined the relationship between "Emotional Intelligence" and "Creativity". "Emotional Intelligence" was measured by "Emotional Intelligence Test" which was made based on the definition that "Emotional Intelligence" was the ability to express one's subtle feelings in words. "Creativity" was measured by "S-A Creativity Test" and "Mental Set for Creativity Test" (MSC). In study 1, 48 female junior college students responded to "Emotional Intelligence Test", "S-A Creativity Test", and the part of "WAIS-R Vocabulary Test" which measures "Verbal Intelligence". In study 2, 95 female students from a women's university responded to "Emotional Intelligence Test", MSC, and the Vocabulary Test. In study 1, "Emotional Intelligence" was found to be significantly related to Imagination, Fluency, Flexibility, and Elaboration. In contrast, "Verbal Intelligence" was significantly related to Practical Application and Elaboration. In study 2, "Emotional Intelligence" was significantly related to self-confidence, and "Verbal Intelligence" was significantly related to the personality trait of facing difficulties and trying. The results showed that "Emotional Intelligence" was significantly related to some aspects of "Creativity" and "Emotional Intelligence" and "Verbal Intelligence" were different in the relation to "Creativity". The characteristics of "Emotional Intelligence" were made clear by those results.

Key Words : Emotional Intelligence, Creativity, Verbal Intelligence.

問 題

知能の定義として最も頻繁に引用されるものの一つに、ウエクスラー (Wechsler, D) の定義すなわち「目的的に行動し、合理的に思考し、環境に対して有効に対処する個人の総合的全体的な能力」がある。

ここでいう目的的に行動するための能力、合理的に思考するための能力、環境に対して有効に対処するための能力とは、かなり広い範囲の能力を指すと考えられ、WAISなどの知能テストで測定されている能力がそのすべてであるとは到底思えない。ウエクスラー自身は知能テストで測定している要素は抽象

* 立教大学
Rikkyo University
Department of Psychology, Faculty of Letters

的な推理力、言語を扱う能力、空間を把握する能力、数字を扱う能力などの認知的な能力だけでなく、非知性的要因 (Non-Intellective Intelligence) があると考え、これを測定する尺度を作成する必要があると考えていた (Wechsler, 1950³⁰⁾)。それから40年後にサロベイ (Salovey, P.) によって概念化された「エモーショナル・インテリジェンス」は、ウエクスターが「知能の非知性的要因」と呼んだ要素の一つではないかと考えられる。

「エモーショナル・インテリジェンス」は①自己と他者の感情を評価し表現する、②自己と他者の感情を統御する、③適応的な方法で感情を利用する、の3つの要素を含む能力とされている (Salovey, 1990²²⁾)。ゴールマン (Goleman, 1995⁹⁾) はこれらの要素のうち「エモーショナル・インテリジェンス」の基礎であり、根幹となるのは「感情の自己認識力」であるとし、それを「自分の感情を識別し、それにラベルをつけること」ととらえている。

この「感情の自己認識力」は、ガードナー (Gardner, H.) では「パーソナル・インテリジェンス」として概念化され、彼の唱える多重知能論における6種類の知能因子の中で最も重要なものとして位置づけられている (Gardner, 1983⁵⁾)。

またこれらの研究の流れとは異なるが、ジェンドリン (Gendlin, E.T.) の「体験過程 (感情の流れ: the flow of the feeling) の象徴化能力」すなわち「フォーカシング能力」も「感情の自己認識力」に近い概念ではないかと考えられる。ジェンドリンは体験過程に注意を集めると「何か意味のある感じ (フェルト・センス)」が得られ、それはまだ言語化されていない身体感覚的なものであるが、これに適切な象徴化がなされると好ましい心理的变化、自己洞察が生じると考える (Gendlin, 1961⁶⁾: Gendlin, 1981⁸⁾)。このフォーカシング能力にも個人差があり、心理療法が成功した人の面接テープを聞くと、最初からフォーカシングの過程が生じている (Gendlinら, 1968⁷⁾) という。

これらの概念的に共通性をもつと考えられる能力における個人差は、どのような側面における個人差なのであろうか。

感情に対する認知的アプローチでは、「感情の認知モデル」が自他の感情を理解したり、言語表現したりするはたらきをもつと考えられている (楠見, 1996¹²⁾)。

「感情の認知モデル」とは、身近な人の観察からの解釈、推論、演繹、自分の経験とそこからの類推や帰納などによって成立する感情についての構造化された知識である。この「感情の認知モデル」の重要な構成要素が「感情言語」(emotion language) であり、自他の心的状態と外的状況を認知的に評価して、感情にラベルをつける役割をもつとされる。

福井 (1991⁴⁾) も「感情に気づく」すなわち、どんな種類の感情を今経験しているかを意識するときに、われわれはその感情に対して言語的に命名しているとする。そのときに感情の分類や構造について知識をもっているかどうかということが、自分の感情をより詳しく知るかどうかの分かれ道になるという。このような知識をもっていれば、適切な感情を選択することができ、生じている感情を変更することができ、さまざまな感情を味わうことができるという。

これらの立場では、「感情の自己認識」にとって重要な要素は、感情についての知識であると考えられている。宮崎 (1990¹⁴⁾) が指摘するように、この感情の認知的アプローチでは感情に対する身体的な寄与を否定、あるいは二次的なものととらえている。それに対してフォーカシングの理論では「自分にとって何か意味があるらしいと感じられるような、身体感覚を伴った認知的体験」(村瀬, 1996¹⁵⁾) を重視している。

これらの理論から「感情の自己認識力」の個人差は、感情についての知識の豊富さと身体感覚に気づく傾向の両側面における個人差である可能性がある。

この「感情の自己認識力」を根幹とする「エモーショナル・インテリジェンス」と概念的に関連が考えられるものの一つに「創造性」がある。

「創造性」は「ある目的達成または新しい場面の問題解決に適したアイデアや新しいイメージを生み出し、あるいは社会的・文化的に、または個人的に新しい価値あるものをつくり出す能力、およびそれを基礎づける人格特性である」と定義されており (恩田, 1982¹⁹⁾)、能力的側面と人格特性の両者が含まれている。

創造性の能力的側面に関しては、感情との結びつきが示唆されている。たとえば創造性を最高度に発揮したと考えられるアインシュタインや数学者の広中平祐氏が、洞察のひらめきにおいて情緒を重視し

ていることが報告されている。創造的所産は純粋な意識的熟慮によっては生まれないこと、深層部分の認識は感情と密接な関係があることが指摘されている(恩田, 1971¹⁷⁾)。

また創造的人格は、創造的態度としてとらえることができ、精神的健康の面からとらえた人格特性とほとんど一致するとされている(恩田, 1982¹⁹⁾)。その人格特性として、自己統制力(自己の感情の統制力)・自発性(目標をたて達成しようとする傾向)・衝動性(意欲の強さ)・持続性(執念)・探求心(好奇心)・独自性(人とは違った考えや行動をする傾向)・柔軟性(新しい状況に適應できる傾向)の7つがあげられている。このうち特に「自己統制力」「自発性」「衝動性」「持続性」は「エモーショナル・インテリジェンス」の「感情の統御」「適応的な方法での感情の利用」の側面とかかわりがあると考えられる。

これらのことから「エモーショナル・インテリジェンス」の根幹とされる「感情の自己認識力」と「創造性」との間にも密接な関連性があることが予想された。本研究では両者の関連性を実証的に検討するために、それぞれの能力を測定しようと試みた。

「感情の自己認識力」とは、自己のさまざまな感情の意味を把握する能力である。これを「感情知能」とする。この「感情知能」は、自己のさまざまな感情を言語化する能力に依存すると考えられる。すなわち、さまざまなニュアンスをもつ感情を言語化することにより、はじめてその意味を識別的に把握することが可能となる。そこで「感情知能」を「自己のよりこまやかな感情を言葉にすることができる能力」と操作的に定義し、それをもとに作成したテストを使用して、「感情知能」を測定する。

創造性については、上記の創造性の定義にもとづいて作成され、標準化されているS-A創造性検査と、創造的な人格特性を測定するための「創造的構えテスト」(Mental Set for Creativity: 略してMSC)(青柳ら, 1983³⁾; 堀ら, 1994¹⁰⁾)を使用する。

さらに「言語性知能」の尺度として、WAIS-Rの下位尺度である「単語テスト」の一部を使用する。「単語テスト」は言語性評価点の合計点との相関が最も高く($r = .87$, 18-19歳群)、また動作性検査評価点も含めた全検査評価点合計との相関も最も高いので($r = .80$, 18-19歳群)(品川ら, 1994²⁶⁾)一般的な知能の測度としても利用できると考えられた。

これら3つの能力「感情知能」「創造性」「言語性知能」は、知的能力の異なる側面ではあるが、ある程度の関連性もあると推測される。そこで以下のような仮説が立てられた。

仮説1「感情知能」は「創造性」と有意な相関関係がある。

仮説2「言語性知能」も「創造性」と有意な相関関係があるが、「感情知能」と「創造性」との関連性とは異なる側面において関連がある。

以上の2点を中心に検討することにより、「感情知能」の特徴を明確化していきたい。

方 法

対象者

調査1: 都内私立女子短期大学生48名。

調査2: 東京近郊の私立女子大学生95名。

手続き

調査1: 感情知能テスト, WAIS-R単語問題(言語性知能テスト), S-A創造性検査の一部を一つに閉じた形の質問紙を作成し、授業時間中に一斉に実施した。

調査2: 感情知能テスト, 言語性知能テスト, MSCテストを一つに閉じた形の質問紙を作成し、授業時間中に一斉に実施した。

(1) 感情知能テスト

テスト項目「感情知能」を「自己のよりこまやかな感情を言葉にすることができる能力」と定義し、それに基づくテストを作成した(酒井, 1997²¹⁾)。まず対象者の感情を喚起するために、対象者にとって「大きな意味を持つ二人の人」を思い浮かべてもらい、それぞれの人についてその人と会っているときのことを思い出したり、その人についての全体的なイメージを思い浮かべたときにどんな感じがするか、対象者自身に感じられたものを「〇〇な感じ」という形式で言語化してもらった。一つの言葉を書いたらまたその人について感じをおし、違う言葉やイメージが出てきたら同様に記入してもらった。対象者が感じているものを十分に表現できるまでこの作業を続けてもらった。言葉の長さ、数は自由で制限時間は5分である。

反応語の評定 記述された反応から「感情知能」を推定する。まず各反応語について「感情知能」が高いことを示しているかどうかを評定した。

評定の基準 ①ステレオタイプ度 各反応語は「ステレオタイプな感情表現」から、「その人独自の感情表現」までの連続体上のどこかに位置づけられる。「ステレオタイプな感情表現」は「よりこまやかな感情を言葉にする能力」を必要としないのに対して「その人独自の感情表現」はさまざまな感情状態のうち、よりこまやかな部分を表現したものである可能性があり、高い「感情知能」によって表出可能となると考えた。よって各反応語のステレオタイプ度を評定することにより「感情知能」を推定する。反応語のステレオタイプ度は、個性表現辞典(青木, 1974¹⁾)に載っているか、または出現頻度(本研究以外のデータも含めてこれまで364名から「感情知能テスト」のデータを得たが、そのうち何人がその反応語を表出したかの頻度)によって評定した。

②客観性の程度 各反応語は刺激についての「客観的な記述表現」から刺激によって引き起こされた「主観的な経験の記述表現」までの連続体上のどこかに位置づけられる。自己の感情は情動の主観的な経験であるから、刺激の「客観的な記述表現」は必ずしも高い「感情知能」を必要としない。それに対して、刺激によって引き起こされた「主観的な経験の記述表現」は「感情知能」によって表出される。よって各反応語の客観性の程度を評定することにより「感情知能」を推定する。客観性の程度は、個性表現辞典に載っているかまたは辞典に載っていない言葉でも、他者の個性を表現する言葉と評定されたものは客観性が高いとみなされる。

以上の基準に基づき、各反応語の評定がなされる。評定は以下の流れに沿って行う。

反応語が個性表現辞典に載っている場合(ステレオタイプ、客観的)…1点。反応語が個性表現辞典に載っていない場合 → 出現頻度1%以上(ステレオタイプ)…1点、出現頻度1%未満 → 刺激のもつイメージ、刺激の特性の表現(客観的)…1点、刺激に対する感情の表現→出現頻度0.5%~1%未満…2点、出現頻度0.5%未満…3点。

評定の一致度 反応語の評定は、筆者と研究協力者(社会心理学専攻)の2名が別々に行った。調査1では、全反応数が444で、評定の一致率は93.69%であった。調査2では、全反応数が799で、評定の一致率は93.65%であった。評定の一致しなかった反応語の評定値は両者の平均値をとった。

個人得点 各反応語を評定した後、その得点を個人ごとに合計して「感情知能」の個人得点とした。ステレオタイプで客観的な反応語を少数表出した者は「感情知能」得点が低くなり、その人独自の表現で主観的な反応語を多数表出した者は「感情知能」得点が高くなった。

(2) 語彙テスト WAIS-Rの下位テストの「単語」の問題35問のうち、後半の17問を使用した。制限時間は10分で、分かる語から順に意味を記述してもらった。採点基準は日本版 WAIS-R 成人知能検査法(1994²⁶⁾)に従い、採点した。

(3) S-A創造性検査 1956年のギルフォード研究室の創造性に関する報告から、創造性と関係の深い7因子が明らかにされ、それらを測定するテストのうち「新用途考案テスト」「装置考案テスト」「結果予想テスト」の3種類のテストがS-A創造性検査として選ばれた(恩田, 1969¹⁶⁾)。本研究では時間の制約上「新用途考案テスト」の1題と「結果予想テスト」の1題のみが使用された。

「新用途考案テスト」では、「応用力」が問題とされ、物について多面的に考え、物のもっている属性を有効に役立て活用する能力を測定している。「結果予想テスト」では、「空想力」が問題とされ、現実起こりそうもない事態が起こったとして、その結果どのようなことが生ずるかを空想させる問題で、対象事象について仮説や仮定を立て、事態の変化やそれによって生ずる結果を予想、予測、洞察する能力を測定している。

思考特性としては、トランス(Torrance, E.P.)の方式を採用して「思考の速さ」、「思考の広さ」、「思考の独自さ」、「思考の深さ」の4次元を評価する。「思考の速さ」とは思考の流暢性(Fluency)のことで、一定時間の間にどの程度早く考えられるかという思考の量的特性をあらわす。「思考の広さ」は思考の柔軟性(Flexibility)のことで、多角度から物事をとらえ、多面的に思考を働かす傾向をあらわす。「思考の独自さ」は独創性(Originality)のことで、多くの人が考えつかないような非凡な考えや、課題に対してヒット(むだや無理がない)した巧みな考えや方法を生み出す思考力をあらわす。「思考の深さ」とは具体性(Elaboration)のことで、具体的で完結性の高い思考傾向をあらわす(佐藤・恩田, 1978²³⁾)。これらの4つの次元についての得点を算出した。

(4) MSC テスト

青柳 (1980²⁾) は創造性の育成は可能であるとの立場から、創造性に関する人格要因のうち特に教育可能な創造的態度や構えを取り上げて、それを測定するための尺度を開発した。それがMSCテストである。本研究では67項目からなる版を使用する (青柳ら, 1983³⁾)。

下位尺度は「自己信頼感」(自分に自信を持ち、考えをはっきりと主張すること), 「客観性」(一つの考えにとらわれずに、さまざまな角度から物事を考えること, 「細心さ」(詳細にものごとを考えること), 「挑戦性」(困難な課題に対しても、興味を持って挑戦すること), 「持久力」(課題をあきらめずにやり遂げること), 「探求心」(さまざまなものに対して興味をもつこと) の6つである。

ギルフォード (Guilford, J.P.) の考え方を基礎に開発されたTCT創造性検査 (早稲田大学創造性研究会, 1984²⁹⁾) との関連性が検討され、創造性の高い者はMSCテストの得点が高いことが示されている。

創造性検査よりも実施が容易であること、創造性的人格の側面を測定できることから創造性の指標の一つとして使用した。

結 果

1. 感情知能テスト, 言語性知能テストの記述統計データ

調査1, 調査2, および先行研究 (酒井, 1997²¹⁾): 調査0 ($N=100$, 大学生男女) における感情知能テスト, 言語性知能テストの平均値と標準偏差をTable 1に示した。

感情知能テストの平均値は調査1, 2, 0において有意な差は見られなかったが, 言語性知能テストに関しては, 調査0の結果が調査1よりも有意に高く ($t(146) = -4.35, p < .01$), また調査0の結果が調査2の結果よりも有意に高かった ($t(193) = -5.26, p < .01$)。

2. 感情知能テストとS-A創造性検査との関連性

調査1で得られた感情知能テスト得点, 言語性知能テスト得点とS-A創造性検査得点間のピアソンの積率相関係数をTable 2に示した。

「感情知能」は応用的能力が問題とされる場面よりも, 空想的能力が問題とされる場面での創造性と5%水準で有意な相関を示した。逆に「言語性知能」は応用的能力が問題とされる場面での創造性と5%

Table 1 Mean and SD of EI and Vocabulary tests of Research 1, 2, and 0

	Research 1		Research 2		Research 0	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
EI	12.40	6.11	11.58	7.27	12.46	7.23
Voc	5.85	4.42	6.16	3.75	9.34	4.63

Note: EI-Emotional Intelligence test
Voc-Vocabulary test

Table 2 Pearson's correlation coefficients of EI, Voc, and S-A creativity test scores

	EI	Voc	App	Ima
Voc	.0116			
App	.1277	.3571*		
Ima	.3595*	.1860	.0965	
Flu	.4425**	.2028	.6170**	.5992**
Fle	.3022*	.2640	.7044**	.5476**
Ori	.1360	.2681	.7825**	.2901**
Ela	.3427*	.3503*	.6021**	.7375**
	Flu	Fle	Ori	
Fle	.7282**			
Ori	.5202**	.8219**		
Ela	.7980**	.6347**	.3764**	

Note: App-Application, Ima-Imagination, Flu-Fluency, Fle-Flexibility, Ori-Originality, Ela-Elaboration.
* $p < .05$, ** $p < .01$.

水準で有意な相関を示した。

「感情知能」は創造性の4つの思考特性のうち、「独創性」を除く3特性, すなわち「流暢性」「柔軟性」「具体性」と有意な相関を示した。特に「流暢性」とは1%水準の相関を示した。それに対して「言語性知能」は「具体性」とのみ有意な相関を示した。

「感情知能」は「創造性」と有意な相関関係があるとした仮説1は支持された。また「言語性知能」も「創造性」と有意な相関関係があるが, 「感情知能」と「創造性」との関連性とは異なる側面において関連があるとする仮説2も支持された。「感情知能」は「創造性」との関連性において, 「言語性知能」と異なることが示されたといえる。

3. 感情知能テストとMSCテストとの関連性

調査2で得られた感情知能テスト得点, 言語性知能得点とMSC得点との間のピアソンの積率相関係数をTable 3に示した。

「感情知能」は創造的構え・態度のうち, 「自己信

Table 3 Pearson's correlation coefficients of EI, Voc, and MSC

	EI	Voc	S.C.	Obj
Voc	.1172			
S.C.	.2475*	-.0003		
Obj	.2024	-.0243	.5590**	
Scr	.0918	-.0809	.0968	.3150**
Fac	.1373	.2142*	.5756**	.3376**
Sti	.0566	.0013	.2272*	.1709
Inq	.1637	.1086	.5886**	.3610**
Tot	.2326*	.0575	.8288**	.6991**
	Scr	Fac	Sti	Inq
Fac	.0745			
Sti	.2299*	.1194		
Inq	.0965	.3765**	.1067	
Tot	.3854**	.6761**	.5529**	.6212**

Note: S.C.-Self-Confidence, Obj-Objectivity, Scr-Scrupulousness, Fac-Facing difficulties and trying, Sti-Stick to it-iveness, Inq-Inquisitiveness, Tot-Total score of MSC.
* $p < .05$, ** $p < .01$.

頼性」との間に有意な相関を示した。他の5つの下位尺度とは有意ではないが正の相関を示しており、MSCの合計得点とは有意な相関を示している。それに対して「言語性知能」は創造的構え・態度のうち、「挑戦性」との間に有意な相関を示したが、他の下位尺度とはほとんど相関がなく、MSCの合計得点との間にも有意な相関は見られなかった。「感情知能」は「言語性知能」よりも創造的な人格特性との関連性が強いことがわかった。

これらの結果は仮説1、仮説2を支持するものであった。

考 察

1. 感情知能テスト、言語性知能テストの記述統計データについて

言語性知能テストの結果がサンプルによって異なり、調査1、2に比べ、調査0での結果が有意に高いという結果になった。調査0は都内の私立大学で実施されたが、調査1、調査2の実施された大学よりも大学入学の際に必要なとされる偏差値が高いので、調査0の対象者は調査1、2の対象者に比べ、学業成績が良いことが推測される。学業成績は一般的知能と相関があることから、調査0で言語性知能得点が

有意に高かったことは予想される結果である。

それに対して「感情知能」はサンプル間で有意な差が見られなかったということは、「感情知能」が学業成績とはあまり関連性がないことが示唆されたといえる。

ただし「感情知能」と「言語性知能」との間にはある程度の相関が見られている(酒井, 1997²¹⁾) が、本研究では有意な相関は示されなかった。理由として考えられるのは、調査1でのサンプル数が少なかったことと、問題が難しかったため「言語性知能」の平均点がかかなり低くなってしまったことから、「言語性知能」の個人差を十分に反映できなかった可能性があげられる。今後データを積み重ねて、両者の関係についてさらに検討していく必要がある。

2. 感情知能テストとS-A創造性検査との関連性について

先行研究では「知能」と「創造性」との関連性については検討されている。トールンス創造的思考テストを使用した研究では、「知能」と「創造性」との相関は有意ではなかったという報告(Sen, A.K. & Hagtvet, K. A., 1993²⁵⁾) や「言語的創造性」は「知能」と関連があるが、「図的創造性」は「知能」と関連がなかったという報告もある(Yong, L.M.S., 1994³¹⁾)。恩田(1982¹⁹⁾) は多くのデータの解析結果から、「知能」と「創造性」との関係は小学校低学年ではその関係は深い、高学年になり中学生になるにつれて、その関係は浅くなり、成人の場合かなり分化してくると結論づけている。また一定の知能水準(IQ120)以上ではその分化が著しくなる傾向が認められるという。「知能」と「創造性」との関係は対象者の年齢により、また知能の水準により異なり、単純な関係ではないことが示されている。

本研究では、「言語性知能」と「創造性」との関連性が調べられ、3つの思考特性で.20台の相関が示された。これは住田の大学生を対象とした先行研究とほぼ一致する(恩田, 1982¹⁹⁾)。

「感情知能」と「創造性」に関する先行研究はないが、「感情知能」と概念的に近いと考えられる「フォーカシング能力」と「創造性」との関連性について検討した研究がある。ジェンドリンら(Gendlin, E.T., etc., 1968⁷⁾) は、高校生にフォーカシングマニュアルを与え、実施させた後、自己評価によって「フォーカシング能力」を査定した。その高点群と低点群で、

「創造性」の指標の一つとされる隠し絵テスト (Hidden Figures Test) の結果を比較したところ、フォーカシング高得点群では隠し絵テストの高得点者が有意に多いことが示された。これは「フォーカシング能力」と「創造性」との関連性を示唆する結果である。

本研究でも「感情知能」と「創造性」との間に有意な相関関係が示された。4つの思考特性のうち「独創性」以外の特性は.30以上の相関係数を示した。「感情知能」は「独創性」と定義された「多くの人が考えつかないような非凡な考えや、方法を生み出す思考力」とは関連性がないことが分かった。それに対して、「柔軟性」すなわち多角度から物事をとらえ、多面的に思考を働かす傾向、「具体性」すなわち具体的に完結性の高い思考をする傾向、「流暢性」すなわち一定時間の間に早く考えられる思考特性とは関連性があることが分かった。

「感情知能」は喚起された感情のさまざまな側面を言語化できる程、その能力が高いと考えられる。思考の「柔軟性」はものごとに対して多角度から多面的に考える傾向であるが、それは感情を多面的に意識化する能力と関連があるということが示唆されたといえる。

また「感情知能」は「自己のよりこまやかな感情を言葉にすることができる能力」であるから、感情を明細化できるほど、その能力が高いと考えられる。思考の「具体性」はアイデアをより詳細に、具体的に示す特性であるが、それは感情を詳細に意識化する能力と関連があるということが示唆されたといえる。

最後に「感情知能」はある一定の時間内に感情の言語化をさせた結果に基づいて測定しているので、一定時間の間に早く考えられる思考特性である「流暢性」と高い相関があったと考えられる。恩田 (1971¹⁷⁾) は、創造性は短距離型と長距離型の二つのタイプに分けることができると考えた。前者はとっさに機転がきくとか、すぐアイデアを出すというタイプであり、後者は時間をかけて一つの仕事を完成するという息の長い創造活動をするタイプである。恩田は今までの創造性テストは短距離型の人にはよいが、長距離型の人を見落とす可能性があるので、時間を十分にかけで行う作業制限法を取り入れたテストを開拓するべきであるという。感情知能テストに関しても時間制限法をとっているため、長距離型の「感情

知能」高得点者を見落としている可能性が考えられる。テスト方法を工夫する必要があると思われる。

以上見てきたように、「感情知能」は「創造性」のさまざまな側面と関連性のある能力であることが分かった。

3. 感情知能テストとMSCテストとの関連性について

MSCテストを使用したのは、このテストが〇×式で回答するテストで、採点に主観性の入り込む余地がないということと創造性の定義に含まれる創造的人格のうち、どのような側面が「感情知能」と関連しているかを探るためである。

MSCテストは、TCT 創造性検査、S-A 創造性検査との間に関連があることが示され、妥当性があることが確かめられている (吉光ら, 1980³²⁾; 高野ら, 1980²⁷⁾; 青柳ら, 1983³³⁾)。また MSC テストと中学生被験者の創造性についての教師評定との間にも有意な相関関係が示されており、MSC テストの妥当性の高さが示唆されている (寺沢ら, 1980²⁸⁾)。

このMSCテストと「感情知能」との関連性を検討したところ、「自分に自信を持ち、考えをはっきりと主張する」傾向である「自己信頼性」との間に有意な相関関係が見られた。また有意にはならなかったが、「一つの考えにとらわれずに、さまざまな角度から物事を考える」傾向である「客観性」との間にも.20台の相関が見られた。

自己の感情を識別することと、自分を信頼する傾向とに関連があるということは、逆に言うと自分を信頼できない状態、自分に自信がもてない場合は自己の感情を適切に識別することができない可能性があるということである。このことからたとえ感情についての知識を豊富にもっており、自己の身体性に敏感に気づく能力を備えていたとしても、「自己信頼性」が得られない場合には「感情知能」が十分に発揮されない可能性があると考えられる。

MSCにおける「客観性」は、S-A 創造性検査による「柔軟性」と概念的に似ており、同様な点で「感情知能」との関連性が見られたものと思われる。

MSCで測定される創造的な構え・態度と一般的なパーソナリティ傾向との関連性を調べた研究によると、「自己信頼性」は指導性、攻撃性、気楽でないこと、抑うつ性と有意な関連が見られている (黒岩ら, 1983¹¹⁾)。指導性、攻撃性は自己主張の強さを示し、気楽でないことは環境に対する鋭敏性を示し、抑う

つ性は孤独傾向を示すものにとらえられている。「自己信頼性」を含めて創造的構えに共通するパーソナリティ特性とは、「自己主張ができ、孤独に耐え、環境に鋭敏なパーソナリティである」とまとめられている。

「感情知能」を「感情の認知モデル」によってとらえると、感情についての構造化された知識は、身近な人の観察や自分の経験をもとにして獲得されるものなので、その人の人間関係における経験が大きく影響するものと思われる。そのような側面からも「感情知能」は、パーソナリティとの関連性が深いと考えられる。本研究で示唆された「感情知能」と「自己信頼性」との関連性を手がかりに、「感情知能」に関連するパーソナリティ要因についても検討していく必要があると思われる。

結 論

「感情知能」は「創造性」と関連のある能力であることが示された。「創造性」の重要性は特に1950年以降内外で指摘され、その教育あるいは開発についてのさまざまな試みがなされている。現在の創造性テストには批判もあり (Lissits, R. W. & Willhoft, J. L., 1985¹³⁾; Runco, M.A. & Mraz, W., 1992²⁰⁾など)「創造性」をテストで測定することはできないという考え方もある (佐藤, 1997²⁴⁾)。しかし社会が「創造性」を必要とする限り、心理学的研究も続けられていくのではないだろうか。

「感情知能」に関しては1990年以降、その重要性が主張され始めたが、概念化されただけで、測定しようとする試みはあまりなされていない。数値化に反対する考え方もあるが (佐藤, 1997²⁴⁾)、測定は序列化のために行うのではなく、「感情知能」の構造を明確化し、その教育のための方法を探る上で重要だと思われる。「感情知能」も現在の社会で必要とされている重要な能力の一つであり、心理学的に研究されるべきテーマであると考えられる。今後さらに測定方法を工夫し、テストの妥当性・信頼性を高め、性差や発達的特徴などについて検討していきたい。

要 約

「感情知能」と「創造性」との関連性について検討した。「感情知能」は「自己のよりこまやかな感情を言葉にすることができる能力」という定義をもと

に作成された感情知能テストによって測定された。「創造性」はS-A創造性検査と創造的構えテストによって測定された。調査1では48名の女子短期大学生に感情知能テスト、言語性知能テスト、S-A創造性検査が実施され、調査2では95名の女子大学生に感情知能テスト、言語性知能テスト、創造的構えテストが実施された。調査1では「感情知能」と「空想力」「流暢性」「柔軟性」「具体性」との間に有意な相関が見られたのに対し、「言語性知能」は「応用力」「具体性」との間に有意な相関が見られた。調査2では「感情知能」は「自己信頼性」と有意な相関を示し、「言語性知能」は「挑戦性」と有意な相関を示した。「感情知能」は「創造性」と関連のある能力であること、「感情知能」は「創造性」との関連性において「言語性知能」と異なることが示された。これらの結果から「感情知能」の特徴がより明確化された。

謝 辞

本論文の作成を指導して下さった石井巖教授 (立教大学) に深く感謝致します。またS-A創造性検査についてご教示いただいた恩田彰名誉教授 (東洋大学) に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 青木孝悦 個性表現辞典—一人柄をとらえる技術と言葉—ダイアモンド社 1974.
- 2) 青柳肇 創造的構えテスト作成の試み 大和学園女子短期大学紀要 1980, 5, 1-7.
- 3) 青柳肇・久米稔・高野隆一・吉光清 TCTとMSC (創造的構え) との関連—MSC各項目の検討—日本応用心理学会第50回大会発表論文集 1983, 16.
- 4) 福井康之 感情の心理学 川島書店 1991.
- 5) Gardner, H. Frames of Mind. Basic Books, New York 1983.
- 6) ジェンドリン E.T. 村瀬孝雄 (訳) 体験過程—治療による変化における一変数 村瀬孝雄 (編訳) 体験過程と心理療法 ナツメ社 1981, Pp. 19-38. (Experiencing: A Variable in the Process of Therapeutic Change. *American Journal of Psychotherapy*, 1961, 15, 233-245.)
- 7) Gendlin, E.T., John Beebe III, James Cassens, Marjorie Klein, and Mark Oberlander Focusing Ability in Psychotherapy, Personality, and Creativity. *Research in PSYCHOTHERAPY* VIII

- 1968, 217-241.
- 8) ジェンドリン E.T. 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) フォーカシング 福村出版 1982. (Gendlin, E.T. *Focusing*, 2nd ed. New York: Bantam Books 1981)
 - 9) Goleman, D. *Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ*. Bantam Books, New York 1995.
 - 10) 堀洋道・山本真理子・松井豊編 心理尺度ファイルー人間と社会を測るー 垣内出版 1994.
 - 11) 黒岩誠・久米稔・小関賢・三島正英 MSCとMG性格検査との関連について 日本応用心理学会第50回大会論文集 1983, 19.
 - 12) 楠見孝 感情概念と認知モデルの構造 土田昭司・竹村和久編 対人行動学研究シリーズ4 感情と行動・認知・生理ー感情の社会心理学 誠信書房 1996, Pp29-54.
 - 13) Lissits, R.W. & Willhoft, J.L. A Methodological Study of the Torrance Tests of Creativity. *Journal of Educational Measurement*, 1985, 22, 1, 1-11.
 - 14) 宮崎清孝 感情と認知 日本児童研究所編 児童心理学の進歩 金子書房 1990, XXIX, 161-187.
 - 15) 村瀬孝雄 解説 村瀬孝雄 (監訳) フォーカシング入門マニュアル 第3版 金剛出版 1996, Pp. 137-158. (Cornell, A.W. *The Focusing Student's Manual*. 3rd ed. 1994)
 - 16) 恩田彰 S-A創造性検査手引き 東京心理 1969.
 - 17) 恩田彰 創造性の研究 恒星社厚生閣 1971.
 - 18) 恩田彰・床岡治男 創造性検査の構成とその活用 佐藤三郎・恩田彰共編 創造的能力ー開発と評価ー 東京心理 1978, Pp. 119-138.
 - 19) 恩田彰 創造性の発達 詫摩武俊・飯島婦佐子共編 発達心理学の展開 新曜社 1982, Pp. 172-186.
 - 20) Runco, M.A. & Mraz, W. Scoring Divergent Thinking Tests Using Total Ideational Output and a Creativity Index. *Educational and Psychological Measurement*, 1992, 52, 213-221.
 - 21) 酒井久実代 「感情知能」の測定の試みー感情の象徴化能力に焦点をあてたテストの作成ー 投稿中 1997
 - 22) Salovey, P. & John D. Mayer *Emotional Intelligence. Imagination, Cognition and Personality*, 1990, 9, 3, 185-211.
 - 23) 佐藤三郎・恩田彰共編 創造的能力ー開発と評価ー 東京心理 1978.
 - 24) 佐藤達哉 知能指数 講談社現代新書 1997.
 - 25) Sen, A.K. & Hagtvet, K.A. Correlations among Creativity, Intelligence, Personality and Academic Achievement. *Perceptual and Motor Skills*, 1993, 77, 497-498.
 - 26) 品川不二郎・小林重雄・藤田和弘・前川久男 (訳編) 日本版 WAIS-R成人知能検査法 第5版 日本文化科学社 1994 (Wechsler, D. *Manual for the Wechsler Adult Intelligence Scale-Revised*. The Psychological Corporation. 1981.)
 - 27) 高野隆一・久米稔・寺沢美彦・三島正英 創造的構え (MSC) テスト作成の試みIV. S-A創造性検査との関連 第47回日本応用心理学会大会論文集 1980, 48.
 - 28) 寺沢美彦・久米稔・高野隆一・三島正英 創造的構え (MSC) テスト作成の試みII. 教師評定との関連 第47回日本応用心理学会大会論文集 1980, 46.
 - 29) 早稲田大学創造性研究会 (代表者・久米稔) TCT創造性検査手引書 早稲田大学創造性研究会 1984.
 - 30) Wechsler, D. Cognitive, Conative, and Non-Intellectual Intelligence. *The American Psychologist*, 1950, 78-83.
 - 31) Yong, L.M.S. Relations between Creativity and Intelligence among Malaysian Pupils. *Perceptual and Motor Skills*, 1994, 79, 739-742.
 - 32) 吉光清・久米稔・青柳肇・小関賢 創造的構え (MSC) テスト作成の試みIII. TCT創造性検査との関連 第47回日本応用心理学会大会論文集 1980, 47.
- (受付: 1997.8.14, 受理: 1997.12.13)